

むかし、乗鞍岳のふもとの沢山というところに、長吉という炭焼きが住んでいました。ある晩のこと、長吉が寝ていると、枕元に仙人のようなおじいさんが現れて、「飛驒の高山に行つて、みそ買い橋の上に立つていてみよ。たいそう良いことを聞くであらう」といいました。はっと目を覚まして、あたりを見ましたが、おじいさんのすがたはありませんでした。

つぎの日、長吉は、ただの夢だろうと思ひながらも、炭を売りに飛驒の高山へ行きました。そして、みそ買い橋の上に立つていましたが、丸一日たつても何も聞けませんでした。二日目も三日目も、何のいいことも聞けませんでした。

五日目、長吉がみそ買い橋の上に立つてため息をついていると、橋のたもとの豆腐屋のおやじが、近寄つてきていいました。

「おまえさん、この間からこの橋の上に立つて、もう五日になるが、いったい何を待っているんだ」

長吉は、

「いえ、夢に、仙人のようなおじいさんが出てきて、飛驒の高山のみそ買い橋の上に立つていたら、よいことを聞けるといつたのです」と、夢の話をしました。すると、豆腐屋のおやじは、笑っていいました。

「つまらない夢なんか、あてにしなさるな。わしもこの間夢を見たよ。仙人のようなじいさんが現れて、なんでも乗鞍岳のふもとの沢山とかいう村に、長吉という炭焼きがいる。その家のそばの松の木の根元を掘れば、宝物が出るというんだ。だが、わしは、乗鞍岳のふもとの沢山なんて村は、どこにあるか知らない。よし知っていたとしても、そんなばかげた夢を信じる気持ちにはなれん。悪いことはいわない。おまえさんもいいかげんにして、お帰んなさい」

それを聞いて、長吉は、

「これこそ、おじいさんがいつていたことに違ひない」と思いました。そして、お礼もそこそこに、身も心もおどる思いで、飛ぶように村へ帰つていきました。

帰るなり、長吉は、松の木の根元を掘ってみました。すると、金銀のお金や宝物がざくざく出てきました。

長吉は大金持ちになつて、福德長者と呼ばれるようになったということです。おしまい